

## 20. 母趾外転運動が動的姿勢制御に及ぼす影響について

○富樫 昌彦 (とがしまさひこ)(PT)<sup>1)</sup>, 佐竹 勇人 (PT)<sup>1)</sup>, 田邊 愛弓 (PT)<sup>1)</sup>,  
澳 昂佑 (PT)<sup>1),2)</sup>, 杉岡 辰哉 (PT)<sup>1)</sup>, 小林 佑介 (PT)<sup>1)</sup>, 井上 純爾 (PT)<sup>1)</sup>,  
工藤 枝里子 (PT)<sup>1)</sup>, 河口 泰之 (MD)<sup>1)</sup>, 熊井 司 (MD)<sup>1),3)</sup>

<sup>1)</sup> 医療法人和幸会 阪奈中央病院 スポーツ関節鏡センター

<sup>2)</sup> 四條畷学園大学 リハビリテーション学部 理学療法学専攻

<sup>3)</sup> 早稲田大学 スポーツ科学学術院

### 【目的】

臨床の場面において、母趾外転運動が随意的に困難なケースを多く見受けられる。母趾外転筋は母趾の外転運動のみならず、荷重位において内側縦アーチを保持し、足部不安定性を防ぐとされている。しかし、母趾外転運動と動的姿勢制御の関連は明らかになっていない。よって本研究の目的は母趾外転運動と動的姿勢制御の関連性について比較検討することとした。

### 【対象と方法】

対象は足部に整形外科的疾患のない健常男性 19 名 19 肢 (年齢  $29 \pm 4.89$  歳, 身長  $175.6\text{cm} \pm 5.1\text{cm}$ , 体重  $75.5\text{kg} \pm 14.3\text{kg}$ ) とし, 母趾外転運動が可能群: AHM 群 (9 名) と不可能群: NAHM 群 (10 名) に分け, Star Excursion Balance Test (以下 SEBT) を測定した。SEBT は 8 方向のリーチ距離を測定し, 各方向 3 試行の平均値を棘果長で除して算出した。統計学処理は群間比較に Mann-Whitney U 検定を用い, 有意水準は 0.05 未満とした。

### 【結果】

AHM 群は NAHM 群と比較して SEBT の前外方・外方・前内方のリーチ距離が有意に増加した。また群間に年齢, 身長, 体重に有意な差は認められなかった。

### 【考察】

母趾外転筋は前外方・外方・前内方への重心移動に対し動的姿勢制御に関与する報告があり, 本研究でも同様に SEBT で前外方・外方・前内方で母趾外転運動が可能な対象者においてリーチ距離が大きかった。母趾外転運動が可能な者は動的姿勢制御における前外方・外方・前内方の安定性に寄与する可能性が示唆された。